

第65回NHK杯全国高校放送コンテスト大阪大会報告

放送コンテスト委員会

表題の大会の予選を平成30(2018)年6月3日に大阪夕陽丘学園高等学校で、決勝を6月17日に東海大学大阪仰星高等学校で行いました。それについて、報告をします。

予選 参加校(エントリー) 57校 364名(作品) [内訳はあとの表1参照]
ここから 25校 79名(作品)が決勝に進出
審査員 [あとの表2参照]

決勝

[アナウンス決勝課題]

大阪のなにわの伝統野菜の一つ、吹田市特産の「くわい」を若い世代にも知ってもらおうと、子どもたちが植え付けを体験する催しが行われました。
くわいは、丸い実から芽が出ているさまがめでたいとされ、煮物にして、正月のおせち料理などに使われる野菜です。
きょうは地元の小学生などおよそ100人が、吹田市役所前に集まって、120本のくわいの種イモの植え付けを体験しました。子どもたちは、バケツで土と肥料を混ぜ合わせたあと、丁寧に植え付けていました。植え付けたくわいは、参加者がそれぞれ家に持ち帰って育て、12月ごろに収穫するという事です。
参加した小学5年生の女の子は、「去年は、うまく育てられなかったのですが、今回は大切に育てたいです」と話していました。

[朗読決勝課題]

「監督、これで最後のユニフォームになりますが」
「そうですね… …」
「寂しくなります」
「えへへ。まだ、試合があるから。まだ」
さりげない言葉だが、その表情にお気持ちがすべて表れていた。
スポーツキャスターとして、最高のそして最もせつない”ぶら下がり”だった。

(有働由美子「ウドウロク」)

審査員<敬称略>

<アナウンス・朗読部門>

大橋信之(NHK大阪アナウンサー)、秋本みゆき(大阪市立高校:高視研役員)、伊藤元也(四天王寺学園高校:高視研役員)、田名瀬さゆり(大阪府立桜塚高校:高視研役員)、松田朋子(大阪府立みどり清朋高校)、山中 華(箕面自由学園高校:高視研役員) 安田知博(「放送部インストラクター」)
計時担当:廣津麻美(高視研役員:大阪緑涼高校)

<番組制作部門>

中根 健(NHK大阪放送局制作部チーフプロデューサー)、岩崎判二(大阪府立泉北高校校長:高視研会長)、久下哲也(大阪府立池田高校:高視研役員)、阪本純治(桃山学院高校:高視研役員)、佐々木孝夫(大阪府立摂津高校:高視研役員・芸文連役員)、戸野佑亮(高視研役員:大阪府立槻の木高校)、伴 慎一(大阪市立今宮工科高校:高視研役員)

計時・著作権処理確認担当:酒井 学(大阪府立堺西高校:高視研役員)、佐分利義和(大阪府立みどり清朋高校:高視研役員)

決勝の結果は表3に示します。

今年度の特徴として、①今回も参加校が50校を超えたこと(前回58校)、②朗読のエントリーが200名を下回ったこと(前回234名)、③研究発表のエントリーが4発表と大きく減少したこと(前回11)があげられます。

①について、今回は57校でした。少しずつですが、参加校も増えてきています。何年かぶりにエントリーされた学校もありました。少しずつでもエントリー校が増えていけば、もっと盛り上がるのではと考えています。100校超えますと、その次の年は全国大会には2倍エントリーできます。2020年に行われる第67回大会の全国大会は関西(兵庫県)での開催です。そこまでに、大阪としても参加者増なども含めて意識していきたいところです。

②について、前回と同様の対応をしました。

(1)決勝での発表順序をアナウンス→朗読にする。

(2)アナウンスの決勝課題を、当日発表から2日前にホームページ上での発表に変更する。

(3)朗読の決勝課題を短くする。

の3点です。

今回も「朗読の決勝に30名近くが進出するのは、多いのでは」というご意見もいただきました。今のところ「これだ!」という対応ができていないのかもしれませんが、ご意見がございましたらよろしくお願いいたします。

③について、60回大会から毎回研究発表のエントリーがありました。今回も各校で工夫をされた内容を発表してもらえました。予選を行いました。4発表とも決勝でも全体会場でライブ発表を行いました。全国大会でもステージ上での発表はありません。発表したみなさんも緊張したことでしょうが、よい経験になったかと思えます。

今回も参加校の顧問の先生方に、審査員や会場係としても関わっていただくことを行いました。前回も述べましたが全国大会でも「審査・運営に付き添いの顧問の先生方をお願いしたい」ということでしたので、大阪大会でも実施しております。次回以降も同じ方向で考えております。また、できるだけ多くの先生方に審査員をお願いできますよう、技術講座でも審査についての時間を取っていきたくと考えております。

以前からも申し上げましたが、文化部の活動に対して、顧問の付き添いなど十分な理解を得られていない学校もあるようです。近年は付き添いの顧問に役割をお願いすることは増えてきておりますので、事情をご理解いただきますようお願いいたします。

また、無理をお願いしたにもかかわらず、顧問の先生方にご協力いただいたおかげで予選がスムーズに進むことができました。ここにお礼申し上げます。

予選は、大阪夕陽丘学園高校で行いました。筆者の所属校で過去何回も会場となっておりますから、参加のみなさんにも迷わずに来ていただけたと思います。

決勝では、今回初めて東海大学附属大阪仰星高校を使いました。他施設とは異なり、会場内の移動や時間を気にせず利用できたことが大きかったです。NHKからは大橋アナウンサーと中根ディレクターに審査員長をお願いしました。お二人ともお忙しい中で長時間の審査をしていただきました。各校の顧問の先生方にも長時間の審査をしていただきました。改めてお礼を申し上げます。

各部門の昨年度と比較を次の表4に示します。

表4 各部門の昨年度と今年度の参加学校数とエントリー数の比較

部門	前回		今回	
	学校数	エントリー数	学校数	エントリー数
アナウンス	29	77	26	78
朗読	44	234	41	191
ラジオドキュメント	8	13	6	9
テレビドキュメント	6	7	9	10
ラジオドラマ	18	33	19	29
テレビドラマ	10	11	6	10
研究発表	9	11	4	4

今回はアナウンスのエントリーは同数、朗読が減りました。指定作品の内容もあったでしょうが、「取材をしなくてよい」、「原稿を書かなくてよい」ということでは朗読を選ぶことは…ということでは理解されてきているのでしょうか。近年の「朗読ブーム」で、いろいろな大学や団体が主催しての「朗読コンテスト」が行われています。いつも「朗読はただの本読みではない」ことを技術講座などを通じて訴えてきていますが、各コンテストで評価されるポイントが異なります。しかし、各コンテストに共通していえることは、「作品の内容をしっかりと理解して表現すること」だと思います。この部分を少しずつ伝えていけたらと思います。決勝課題の「監督」は長嶋茂雄さんのことです。生徒さんには、「誰?」なののでしょうか。筆者の世代では長嶋監督のイメージはある程度固定されていますが、こちらのイメージからかけ離れた「監督」を聞くことができました。やはり、朗読は難しいです。なお、指定朗読作品の割合は表5に示します。

番組部門では、テレビドキュメントの参加校が増えたことが注目されます。年々ドキュメントドラマとも、一定レベルに達した作品が多かったという印象です。特に、テレビドキュメントの箕面高校と箕面自由学園高校の作品は、丹念な取材と練り込まれた構成から見応えのある作品に仕上がっていました。どちらも全国大会で制作奨励賞を受けました。

ラジオドラマは相変わらず30作品近くの参加があります。ラジオドラマに偏るのは、声優へのあこがれと「ドラマは脚本を書けばできる」と考えているふしもあるのかなといつも考えています。筆者の意見ですが、「ドラマこそ取材が必要」と思います。設定などにリアリティーがあるものが全国大会でも上位に入っているように思います。「ドラマとは」ということもしっかりと広めていきたいです。

その中で、天王寺高校の「命の価値」は全国で入選(6位に相当)しました。構成もよく練られていたとしましたし、最後のシーンで「えっ!?!」と思わせる考えさせられるものでした。

生徒たちは、普段はラジオをほとんど聞かないとか、聞いてもDJなどのトーク番組しか聞いたことがないようです。そのような生徒たちに実際に番組を作らせることは大変です。でもこれは教員向けの指導者講習会の席でも、「番組制作は、アクティブラーニングを実践しているのだ」と意見も出てきます。脚本を作

り、編集をして、物作りの過程とその大切さが理解されるでしょう。しかし、全国に進出するためには、きちっとした準備が作品のレベルアップにつながるのかなと考えます。生徒だけでなく私たちも研修していくことが、大阪の課題の一つではないでしょうか。

決勝では、今回も卒業生に司会をお願いしました。南高校の小林瑞季さんと旭高校の竹尾和季さんです。お二人とも朗読で全国大会に進んだのですが、司会の方もきちんと対応していただきました。お二人ともお忙しい中を本当にありがとうございました。

(大阪夕陽丘学園高等学校 中井勝久)